

定点観測

成田重行 流

「地域開発の戦略学」

4

大島と緑の真珠 ③

小さい人が勝てるものをつくりたい

東日本大震災から5年。気仙沼大島はいまも復興途上にある。前回紹介した「復興そば」のように、そこに息づく文化を掘り起こし育てながら、成田さんはこれからも大島に通い続ける。

文・写真／窪田新之助

離島が孤島になる 頼みの綱を死守

改めていえば大島は離島である。

島民たちが「本土」と呼ぶ側から来るには、JRの気仙沼駅から2km近い距離にある船乗り場から定期船で25分かかる。個人的に船をチャーターするなら別だが、いまのところ来島するにはこの定期船に頼るしか術はない。25分などわずかと感じるかもしれないが、時によって、この距離があまりに遠くなることもある。

現代に生きる島民にとってそのことを最も強く感じさせたのは、2011年3月11日に発生した東日本大震災においてだろう。あの日、島を飲み込むような大きな津波が繰り返し襲ってきた。それまで気仙沼と大島を結ぶ連絡線は車両を積載できるフェリーが3隻、人だけに乗せられる客船が2隻あった。それが大津波

で3隻のフェリーは大破。2隻の客船も行方不明になったり破損したりして、公共の交通手段は一切なくなった。

その結果、どうなったか。島は一時的に孤島と化した。現代の利器など天災の前にあってみればじつにもろいものである。

津波が押し寄せる直前、大島がやがて孤島となるのを直感的に予想した人物がいる。個人で運営している連絡船「ひまわり」の船長・菅原進さんだ。

菅原さんはあの日、自宅で大きな地鳴りを感じた瞬間、「巨大な津波が必ずやってくる」と直感した。そして何を思ったのか、すぐに「ひまわり」の停泊場に向かい、それに乗り込んで沖に突き進んでいった。

この直前、菅原さんが短い時間のなかで想像したのは次のような事態だ。あれだけの大津波に襲われたら、

定期船や漁船はひとたまりもないに違いない。船が1隻もなくなってしまう。大島はしばらく孤立してしまう。そうであれば、何としても「ひまわり」だけは死守しなければならぬ。そんな決死の覚悟が、かつてマグロ船に乗っていたときに聞いた、ある言葉を思い出させた。

「遠くの時は早く逃げろ。近くの時は向かっていけ」
時化とは悪天候のため海上が荒れること。間近に迫った大津波には逃げずに、向かっていくべきだと覚悟した。驚くべきことに、菅原さんは巨大な壁と化した津波に「ひまわり」で接近し、それに乗り上がり、さらには突き抜けたのだ。

やがて沖から戻ってきた菅原さんの目に映ったのは、当初予想したとおりの惨状だった。大島と本土を結ぶ定期船に加え、漁船も一様に行方不明になったり大破したりしてい

た。その結果、大震災からしばらくの間は「ひまわり」だけが本土とを結ぶ頼みの綱となった。

島民の間でも賛否両論 架橋は復興のシンボルか

大震災が島民に改めて突きつけたのは、離島は孤島になりうるという現実である。孤島とは、生活必需品が底を突いても、島外から支援がやってくることを意味する。



プロフィール

成田重行（なりた しげゆき）

1942年生まれ。70年立石電機（現オムロン）入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05～09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。

大島と緑の真珠③ 小さい人が勝てるものをつくりたい



「不便だからこそ遊びに来てくれた人は多い」と白幡美千子さん

たとえば水の問題。大島は本土から海底送水管で水を引いている。それが大震災によって海底送水管が壊れ、途端に水不足に陥った。困った島民たちは小学校のプールに貯めていた水を浄化して、飲料に使ったそう。

大震災は島民に架橋の必要性を痛感させた。大島と本土を結ぶ橋の施工計画は震災前には構想段階だった。それが震災後に事業化され、2020年に竣工予定である。

施工主の宮城県は架橋を「復興のシンボル」と位置づけている。ただしその実現は、同時に本土の考え方や論理に取り込まれる可能性が高まることを意味する。それゆえに島民の間ではいまだに賛否両論がある。元アイドル「気仙沼ちゃん」と、白幡美千子さんは架橋を不安視する一人だ。

「大島に来るには船に乗らなければならぬ。でも、不便だからこそ遊びに来てくれた人たちは多いと思う

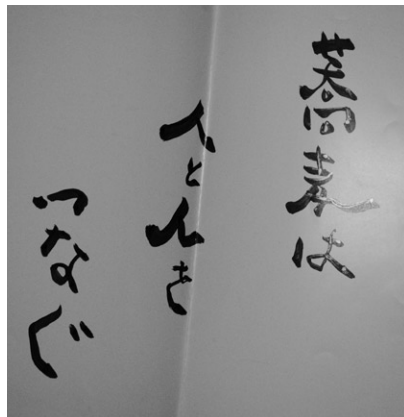
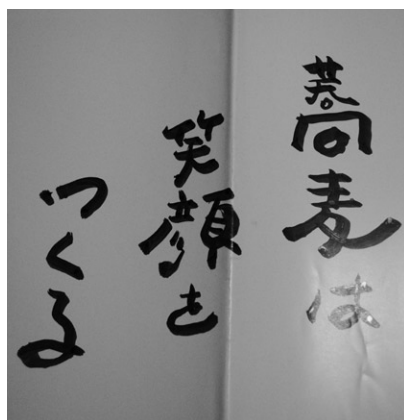
の。橋がかかって本土に近くなってしまうえば、観光するのは日帰りでもよくなるでしょ。そうしたら宿泊客は減って、旅館業は衰退し、なおさら過疎化になるんじゃないかな」

もちろん気仙沼市は新たな誘客産業の創出を計画している。現段階で浮上しているのは、船着場の近くに大型物産館を造るというものだ。ただ、成田さんはお仕着せの地域開発には反対である。

「どこにでもあるようなことをやってみれば、大きい資本や大きい設備を持っている人が勝つんですよ。小さい人は負けてしまうんです。大島ではそうではなくて、小さい人が勝てるものをつくりたい。そういうものでないという意味がない」

そこに暮らす人だけが物事を動かす

では、大島のどこに小さい人が勝つものが隠されているのか。地域プロデューサーとしての成田さんはその所在に気づいている。ただ、答えを披瀝することはない。あくまでも島民たちが自発的に探し始めるのを待っている。「答えをしゃべったところで、島の人々が受け入れる体制になっていないと駄目」だからだ。ただ、折に触れてヒントは出す。たとえば前号で紹介したソバで復興



成田さんが色紙にしたためのメッセージ

を始めたときのこと。成田さんは大島を訪れるたび、帰り際になると水上俊光さんに一筆したためた色紙を手渡していた。そこに書いたのは「蕎麦は笑顔をつくる」「蕎麦は人と人をつなぐ」「蕎麦は長い友達」といった短い一文。みんなソバを栽培したり、打ったりしたりすることが、色紙の文言のような前向きな事態をもたらすことを暗に論じていたのだ。

ここで注目したいのは、地域プロデューサーとしての成田さんの島民との間合いの取り方だ。大島訪問中、島民たちと島の行方について話す場面は幾度となくあった。そのたびに彼らは大なり小なりの悩みを吐露した。けれども、それを聞く成田さんはやはり話題の中心には入らず、どうすべきかも説かなかった。それは多くの地域開発コンサルタントとは

違う手法である。そこには「物事を動かすのはそこに暮らす人たち以外にありえない」という根強い信念がある。

代わりにヒントはちよくちよく出す。「この島のもともとの漁法はどんなのだったのか。それを調べてみる必要があるんじゃないの」「神社のいわれを探れば、面白いんじゃないかな」といったことだ。おそらくこうした言葉の向こうに道筋があるに違いない。

大島に生まれた詩人の水上不二（1904〜1965）はこの島とその周囲の海を「緑の真珠」と呼んだ。成田さんは、大島の人たちが「緑の真珠」とそこに息づく文化の価値を再発見することを、ゆつくりと温かく見守りながら待っている。その日が来るまで、成田さんはこれから大島に通い続ける。